

くつろぎ の デザイン ミラノから

マール模様のガラスの球体が、柔らかな光を放つ。4月に開催された国際家具見本市「ミラノサローネ」で、チェコのメーカー「ブロッキス」は、廃棄されるガラスを再利用した照明を展示した。使用済みガラスを色ごとに分類して粉碎、炉で溶かして生まれる色彩や模様は全て一点物だ。まるで月や星を見ているような。ともすが楽しみななる照明だ。

「美しいと思って手に取った製品がたまたまサステナブル(持続可能)だった。そんな製品を目指している」と最高経営責任者のヤン・ラベルさんは説明する。

見本市や、それにあわせてミラノ市内で開かれる展

サステナブル 品質と共存

示会では、再生素材だからこそ表現できる色彩、手触りをいかした家具が多く提案された。

スペインの「ガンディア・ブラスコ」は建築家の隈研吾さんと組んで、アウトドア用のイスを発表した。座面に使った再生ポリエステル

の生地は、素材で温かい雰囲気。「自然素材のような少しざらざらとした手触りで、素材としての魅力的。木材との組み合わせに挑戦した」と隈さんは語る。

イタリアの「パオラ・レンティ」は、市内のショールームで織物の残り糸や端



隈研吾さんが手がけたイスの座面には、再生ポリエステル素材が使われている

切れで作ったパッドを使ったイスなどを見た。日本の「もったいない」という考え方をヒントに、本来なら廃棄されてしまう素材に、美的な価値を与えている。

各メーカーは競うように環境に配慮した製品を発表してきたが、インテリアジャーナリストの本間美紀さんは近頃、新作を発表するメーカー側の変化を感じるという。「再生素材を使っているか見ただけではわからなくなってきた。サステナビリティーと品質が共存するようになっていく」。長く愛されてきた定番家具のデザイン性を損ねることなく、使用する素材を持続可能なものと切り替えるメーカーも出てきている。

製造工程や輸送の面で、環境負荷の低減に取り組む例もある。日本の「ナガノインテリア」の新作の棚は、1段ずつ独立して使用することも、3段まで重ねて使うこともでき、デザインを

製造・輸送で環境負荷低減も

工夫している。進学や結婚、出産などで、用途や家の間取りが変化しても、長く使い続けることができる。

製造工程においては、テーブルを作るときに出た端材を活用。折り畳んで平らに梱包できるため、輸送コストや二酸化炭素の排出量も削減できる。

棚を手がけたイタリアのデザイナー、ジョバンニ・レバンティさんは、「サステナブルの本質は、ずっと使いたいと思う魅力と機能性を備えたデザインだ」と語る。

環境への配慮は、新たな表現を生み出すきっかけであって、もはや制約ではない。自分の心を満たすデザインと長く付き合う暮らしこそが、くつろぎの時間を運んでくれる。

(この連載は、野口季瑛が担当しました)



「パオラ・レンティ」のイスは端切れなどを使っている「メーカー提供



再生ガラスでつくられた「ブロッキス」の照明は、マール模様が美しい(ミラノサローネの会場で) 野口季瑛撮影

献血「期限」まで協力したい

リクライニングシートに横になると、「チクッとしますよ」と看護師さんの声。久しぶりの献血に行ってきた。

初めての献血は社会人になってからだった。当時の勤め先に毎年献血車が来ており、勤務時

間内でも協力してよかったことがきつかった。血液検査の結果も教えてくれるので、健康管理にも役立つ。私や息子たちだけでなく、献血前の検査で貧血だとわかった友人も、それからは食事など健康に気を配るように

なった。

献血後は20分ほど休憩するよう言われた。最近の献血ルームの休憩室は水分補給のための飲み物が無料で提供されているだけでなく、雑誌なども用意されているのでゆっくり休んでいくことができる。お礼の袋菓子もいただいた。

献血は60〜64歳の間に経験が

くらし 家庭

あれば、69歳まで協力することができる。68歳の私には残りわずかの期間になってしまったが、献血は自分でもできる身近な社会貢献のひとつだ。社会のお役に立っていると思えるのはうれしい。最後まで献血に協力し続けるためにも、健康に気を付けていきたい。

(さいたま市・吉田恵理子 68)



1段でも、2、3段重ねても使える「ナガノインテリア」の棚。生活が変化しても長く使える